2025 年度 職員の研修報告①

今年度も幼稚園協会や様々な場所で研修会が行われます。港南台幼稚園の職員も積極的に研修会に参加し、学びを深めています。前期に提出された研修報告の一部をご紹介させていただきます。

★第1回教員研修 5月 14 日(水)

第 1 分科会「保育に活かすカウンセリングマインド～子どもとおとな おとなとおとな～」

○学んだこと・新たに知ったこと

- カウンセリングマインドとは、カウンセリング活動そのものではなく、カウンセリングの基本的な姿勢を教育の場に活かしていくことである。基本的な姿勢とは、心のつながりを大切にすること・相手の立場に立ち共に考えること・ありのままの姿をあたたかく受け止め見守る・心の動きに応答する、などのことである。
- 大人に対しても、子どもに対しても基本的な考え方や対応は同じなのだと学ぶことができた。

○保育へどう活かしていくか

- 子どもの心を読み取るサインは、主に①表情②視線③声（トーン）④動作⑤姿勢である。保育者は常に五感を働かせてコミュニケーションを取ることが大切である。五感の中で極端に偏りが出ないよう心掛ける必要があるが「対子ども」「対大人」どちらも「目」「耳」からの情報がお互いに多い。ゆえに言葉をしっかり届けるためには、「目から入る情報」と「耳から入る情報」を一致させて伝える意識を持つようにしたい。
- 表面的には相手の思いに寄り添っているようで実はそうではないことは伝わってしまうし、反対に相手に改めて欲しいことがあっても言葉と表情、声のトーンや身振りに一貫性がなければしっかりとは伝わらないということなので一層意識していきたい。

★第一回 港南支部教員研修会 5 月 21 日(水)

「子どもといきもの～ちいさな生命と出会うとき～」

講師；舘野 鴻

○学んだこと・新たに知ったこと

- 虫は人より知覚が少ない。人は色々な感覚があり、視覚が8割である。人は意識したものを見るとき、どこに意識を持っているかによって見え方が違う。虫の死＝汚いとイメージされがちだが、その命にも物語があり、自然界のサイクルの中で意味のあるものであり、生と死のサイクル（環境）があって成り立っている。
- 講師の先生は、虫の絵本を描くにあたり注意深く観察をしている。それぞれの絵本にはテーマやメッセージを込めていて『死ぬ』ということ、次の世代に何かを渡す、などをポジティブに考えている。
- 五感が発達している人は意識したものしか見えてこない。見方を変えてみると新しいものが見えてくる。虫を見る時、どこで何を食べているのか、何をしているのか、どうしてこの環境に毎年いるのかなどを考えて欲しい。
- 舘野先生は、興味を持った虫を作品にするとき、長時間観察＆生態研究を行う。ウンコムシ(オオセンチコガネ)の観察では、循環という面で虫を食べたこともあるらしい。幼虫はバイキンが多く食べるのはダメだが、サナギなら食べても大丈夫とのこと。知識が多いからこそできることだと思った。昆虫はトウモロ

コシの味がするらしい。

- シデムシは死骸を食べて生きる昆虫である。死は誰かの喜びや生命とつながっている。人も本来はその生命の循環の中にあり、野生動物などの糧になっていたはずである。誰かの死は誰かの生の喜びであり、死骸や排泄物などは汚く忌まわしいものではない。
- 環境・社会的な問題は1人ひとりが向き合わなければならず、子どもたちへ伝えていかなければならない。野生動物の生き方から、人間はどうなのか?という問いかけから気付くことは多い。子どもたちから出てくる「なぜ?」を大切にしなければならない。
- 今まで何気なく見て、子どもたちが捕まえたり触ってみたりしていたダンゴ虫が生態系を脅かす外来種であることを知り、もっと身近な生き物について知識を深める必要があると感じた。破壊や環境があってこその生命だという話や移り変わる席を明け渡すという意味で、もっと死をポジティブにとらえるという話は今まで知らず知らずのうちにあった固定観念を打ち破られるような新しい視点を得たように思う。
  虫が苦手なのでどうしたらよいかという質問に対して、「自分で自分を変えるしかない」「虫のことを知らないから苦手なのではないか」「苦手ということで最初から理解しようとしていないのではないか」と答えていた。子どもの「なんで?」「どうして?」の一つひとつを丁寧に拾っていくことが大事だと感じた。
- 人間は五感が発達しているからといって、すべて見え聞こえているわけではない。人には見えない光や音も存在するし、そうでなくても意識しているかどうかによって、見えるもの、見え方、感じ方などは人それぞれ違う。
- 自然界の中にある均衡は小さな虫たちの「おかげ」ということもあり成り立っている。例えば在来種は今までの自然を豊かにしてくれているが、ザリガニや西洋タンポポなどの物に侵され、きれいな生態系の池が泥沼になったりする(ダンゴムシは外来種)好奇心や子どもたちの「なんで?」に気付きそれを大事にすることが大きな意味での自然を大切にしていくことにつながっていくのだと思った。
- 意識する物によって見え方が変わるという話がおもしろいと思った。前の日には気付かなかったことも、その日に発見したり印象に残ることがあると、明日からはそこがとても目に入るということがよくわかった。

○保育へどう活かしていくか

- 虫の死について子どもたちとどう関ればよいかと思っていたが、その命にも物語があるのだという考え方を知り、今までとは違った関わり方ができると思った。
  虫や自然物に関して、子どもが興味を持ったら名前や種類を覚えることよりも、どこで何を食べているのか、どんな行動をするのかを考えること、子どもの「なぜ?」を大切にすることや周りの環境や物語を伝えることが大切という話が印象的だった。子どもの疑問にただ答えるだけではなく、一緒に向き合い考えていきたい。
- 『見方を変えてみる』という点から、子どもの視点は面白いから一緒に子どもの視点に立って虫を見たりしていきたいと思った。「○○だから○○」と当たり前と考えるのではなく、新しい視点で物事を見てみるということを大切にしていきたいと思った。子どもの「なんで?」を大切にしようと思った。
- スマホやパソコンで情報がすぐに入る世の中だが、興味・関心をそこで終わらせてしまうのではなく、五感を使って自分の目で見ていくことの大切を改めて感じた。時間をかけることによって愛着がわいて、もっと好きになったり興味の幅が広がったりするのだと思う。情報社会の今だからこそ、小さな変化をゆっくり楽しんだり、意識したりできる保育者でいたいと思った。舘野先生が長い時間をかけて作った「しでむし」「ぎふちょう」「つちはんみょう」「がろあむし」など、子どもたちを読んでみたいと思った。
- 今、自分が死んでもこの現代では生命の循環にはならず、野生の資源にもならない。地球に何を返していくことができるかを考えると、身の回りの資源を大切にしていくなど環境問題に目を向けなければならない。虫

が好きでも嫌いでも、こうしたことに目を向けるためには自分が自然によって生かされ、地球の資源を消費しており、循環の中にいる自覚を持たなければならない。子どもたちにそこまでを伝えることは難しいかもしれないが、まずは自分自身が生命に興味を持つ姿勢を見せたり、生き物の絵本を見せたりする中で生命に対する子どもたちの「なぜ?」を大切にし、一緒に考えたり同じものを見たり考えたりしたいと思った。

- 身近な生き物に自分自身が興味を持ち、知識をつけることで日本に元々いた生き物に目を向けてもらいやすくなると考えた。そのためまずは自分自身が生き物に対して興味を持つということを意識したい。
  この研修で得た生命の破壊循環という視点で子どもたちにどのように伝えられるかを考えていきたいと思う。
  また、すべての生き物は親がいて、生まれてきて生ききって死んでいく、という話も印象に残った。この 2 点を子どもに伝えることは難しく感じるが、子どもたちの身近にいる大人がそのような視点を持つことで日常の中から伝えていくことが大切であると考えた。
- 今回は虫の話だったが、これを他の物事や人に変えてみるとこれから自分自身の仕事やプライベートでも捉え方が変わるきっかけになると思った。人には苦手なことが1つや2つあると思うが、これは今まで意識をしていないから物事や人をきちんと見えていなかったのではないかと今回の研修を受けて気付かされた。もし、苦手な人がいた時に意識してみるように心がけたいと思う。まずは対象となることや人を知ろうとすること、そして理解しようとすることで苦手意識が払拭されて、自分の価値観を少しずつ変えれば自分の心と身体の変化があるのではないかと思った。
- 舘野先生の著作『しでむし』は死んだ動物や腐った有機物を食べる。死んだ生物の命を他の生物が食べて命を繋いでいる。死は嫌なもの、避けたいものと捉えられがちだが、もっとポジティブにとらえていけるとよい。子どもの興味や好奇心を丁寧に受け止め、知識を与えるのではなく、「どうして?」「なんで?」という思いに寄り添い一緒に考えていくということを大切にしていきたい。
- 虫が苦手だが、子どもたちが虫について興味を持ったり新しく発見したりした瞬間を見ることが好きなので、子どもと一緒に「どこで何を食べてきたのか」「ここで何をしに来ているのか」ということを考えることを楽しみたいと思った。また、触る、においを嗅ぐということで感じることを伝え合う楽しさを子どもたちが味わえるようにしたいと思った。

★第2回港南支部教員研修　6月 18 日(水)
「特別支援における地域の各機関の連携と家庭支援について～事例を中心に～」

○学んだこと・新たに知ったこと

- ぴーすとは、親子一緒に登園し、子どもの発達の様子や対応、進路を一緒に考える場所である。成長を支援し、保護者の子育てをサポートしている。

- 療育センターと民間療育の違いについて、大きな違いは「保護者の付添い、学びがある」ということ。家庭では困り感は少ないが園での集団の場での困り感があって来所することが多い。保護者にもそのような姿を感じてもらえるように「広場」というものを作ったとのこと。未就園、3～4 歳、5歳の3つのクラスに分かれている。3～4歳のクラスは集団での活動を、5歳のクラスは就学を見据えて活動を設定している。
  ぴーすは4歳(年中)からのクラスなので3歳以下のお子さんには民間療育をすすめることもある。
- 療育センターは民間と違い、公的な役割である。民間よりも保護者に対する支援が手厚い(2割こども:8 割保護者)

保護者が一緒に参加でき、子どもへの理解、関り方が深まる。また、小学校を見据え卒園後もつながりを持つことができる。
診療の申込から診察までの期間に次に支援として利用できる「広場事業」がある。予約制だが、相談などもしやすく、週5日いつでも自由に利用できる。

- 支援の流れや方法を知ることができた。事例での説明があったため、何のための子ども支援か、何のための保護者支援なのかを整理することができた。

○保育へどう活かしていくか

- 療育センターと民間療育の違いがわかったので、今後保護者にも伝えていきたい。保護者は療育センターという場所へのハードルが高く、なかなか前向きに受診することが難しい場合がある。しかし、療育センターだからこそ保護者の学びや安心感を得られ、長期的に子どもを支える視点が得られることを丁寧に伝えていきたいと思う。
- ぴーすの専門的で細やかな親子への支援を知り、園としても連携していける心強さを改めて知った。
- 保護者からの相談を受けることもある中で、保護者の話をどこまで聞くことができていたのかと振り返るきっかけとなった。8～9割聞き、その上で知識等話すというのを知り、自分自身の知識も深めながら聞き上手になりたいと思った。

★令和7年度 幼保小教育連携研修会 全体会 基調講演　 7 月 4 日(金)
「遊びは学び 学びは遊び～子どもの「やってみたい」と大人の援助を語り合おう～」

○学んだこと・新たに知ったこと

- いくつかの自治体の取り組みを知ることができた。地域によって様々な交流の仕方があり、大事にすることも違うのだと思った。連携のポイントとして、次のことが挙げられていた
・新たな仕事が増えたと捉えるのではなく、これまでのことをうまく生かしながら行うこと。
・無理なく、わくわくの連鎖が生まれるようにすること。
・互いによいことの情報を発信し合えるような互恵性を持つこと。

- 3年間のモデル事業や自治体の取り組み
・幼児期の終わりまでに育って欲しい姿(10 の姿)でカリキュラムを立てる。
・学校資源の活用をする。幼稚園で定期的に学校の図書館に通い、場所や先生に慣れていくことで安心感につながっていく。
・教科書を園に貸し出し見通しを持てるようにする。
・同じ題材を使った造形あそびをする。幼小の先生たちで話し合い、環境作りや振り返りをして系統性の発見をし発達段階を見ていく。

・ 横浜市以外の他県の取り組み〈架け橋期について〉
・年間計画の目安を明記したり、担当者を明確にする。
・研修をすることで共通した視点を持つ。
・学区がチームとなり一体感を生む工夫をする。
・1年生の教科書を園へ貸し出し、どのようなことを学んでいるのかを把握したり、小学校の先生が園へ見学に行き、環境設定をどのように工夫しているかを見て学んでいる地域もあった。

○保育へどう活かしていくか

・ 一度きりのイベントにならないような工夫を、という話を聞き、一番大切にしたいことだと思った。交流すればよいと思うだけではなく、振り返りをしながら次にはどうしていくか話し合っていきたい。
富士市の取り組みの中で、1年生の教科書を年長クラスに置くということをしていて、自園でも取り入れられるのではないかと思った。子どもたちだけではなく、保育者の学びにもなるのだと思った。
・ 様々な幼保小連携の取り組みを知ることができた。その中でキーワードとして挙がっていたのが『充実した対話』だった。園の環境の視点から小学校の環境を見て感想を寄せたり、声がけの共有をしたりして連携していくということや、子どもの育ちの姿を意識するという視点では、幼保小の先生で一緒に話し合いながら同じ題材を使って遊びを考えるということを、自分もやってみたいと感じた。まだ、あさがおの授業の事例をビデオで見ることができたが、その授業では子どもの意見を受け入れたり、子どもにゆだねたりしながら授業を進めていた。題材は違うが園では野菜作りで同じように子どもたちに意見を聞きながら『自己選択』『自己決定』『自己実現』ということも意識してやってみたいと思った。
・ 幼保小の繋がりとして一部の施設だけが頑張るということでは意味がなく、地域で同じ思いを持ち、共通した視点を持つことで作り上げられていくことが分かった。同じ題材を使った造形あそびは、保育者や教員の声のかけ方、素材の使い方や環境構成の工夫等、お互いに見合うことで学びが深まると感じた。また、振り返りの時間を作ることで、よりそれぞれの専門性が深まったいくのだと感じた。
持続可能な取り組みが架け橋カリキュラム作りにとって大切ということだったので、まずは、子どもの具体的な姿を写真や事例で共有することができるのではないかと思う。